

**露**頭は、地質調査にかかわる者には必要不可欠な場所であり情報です。地下の情報を届けてくれる窓口であるからです。しかし、都市に生活する人々が増えた今、露頭を生活の中で意識することは多くありません。大地そのものの存在も日常生活では希薄になりつつあるのではないのでしょうか？ 本誌では、写真家として露頭にひかれ作品を撮り続けている斉藤麻子さんの作品とその撮影時の思いを、表紙と本欄で連載していきます。また写された露頭の簡単な地質解説もつけました。どうぞお楽しみください。

斉藤麻子さんの活動

<個展>

2007年 「Light My Fire」 Lotus Root Gallery  
 2010年 「Exposures」 コニカミノルタプラザ  
 2011年 「Field Note」 新宿ニコンサロン

<グループ展>

2011年 第4回 写真「1\_WALL」展  
 ガーディアンガーデン

<出版物>

2010年 アサヒカメラ2月号 47～54P,215Pインタビュー  
 2011年 アサヒカメラ9月号 39～46P

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

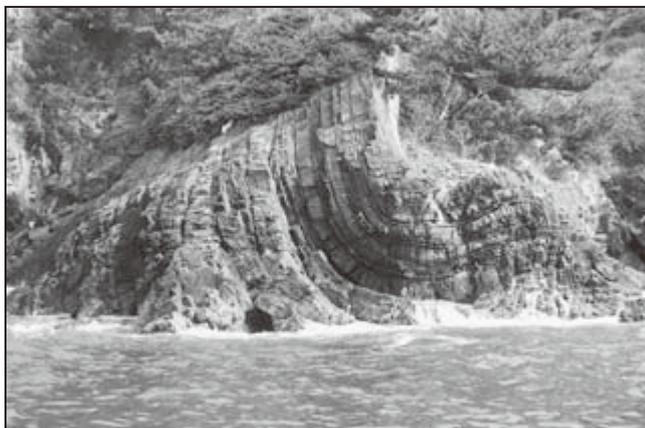
2008年6月に神奈川県川崎市の生田緑地付近を散策していた時のことです、道路の拡幅工事のために露出した少し赤みを帯びた土を偶然目にしました。その時「そういえば小学校の頃に習ったはずの‘関東ローム層’とはどんなものだったか」とふと疑問に思いました。早速帰宅してからインターネットで検索してみますと、大昔に火山から噴出した火山灰が降り積もったもので、赤く見えるのは中に含まれた鉄が酸化した為だということが分かりました。そして何千年何万年何億年も前の、私たちが誰一人として経験したことのない地質時代の記憶を湛えた「露頭」がこの現代の風景のなかに存在するということが、地学とは全く無縁の生活をしてきた私にとって非常な驚きだったので。また地球史のタイムスケールからすれば今ここで「露

頭」と出会うということがとても貴重な体験のように思われ、それ以来、私たちの生活の場に顔を出した「露頭」をテーマに撮影を始めました。

撮影を始めて何カ月か過ぎた頃、多くの名もない露頭をどう見ればよいのかと困っていましたが、地質標本館内に地質相談所が設けられているのを知り、そちらで地質図の見方などを教えて頂くことができました。またその際に館内展示ホールに展示してある「ジュラ紀層の褶曲模型」の撮影もさせて頂きました。格子状のガラス越しに見えるとても大きくて存在感のある褶曲は、無言ながらも私たちは何かとてつもないエネルギーの上で生活している、ということを訴えかけているように思えてならないのです。

地質屋の視点

及川 輝樹



牡鹿層群 荻浜層 福貴浦頁岩砂岩部層の褶曲（宮城県牡鹿半島牧ノ崎）。現在の露頭の高さは約5m。高木秀雄氏撮影。

表紙の地質標本館の褶曲は、宮城県牡鹿半島の牧ノ崎の海岸沿いにある褶曲を実物大に型取りして模したレプリカです。そのため現在も同じ褶曲を現地で見学することができます。褶曲している地層は、中期ジュラ紀から前期白亜紀に堆積した牡鹿層群で、この層群からは豊富にアンモナイト化石を産します。

この褶曲がある牡鹿半島は、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震の影響で著しく沈降した地域にあたり、1mを超える沈降がおきました。左の写真は早稲田大学の高木秀雄教授が2011年8月12日に撮影されたものですが、干潮時に撮影されたにもかかわらず標本館のレプリカと比べると露頭の下部分が水没しているのがわかります。また、地質ニュース第291号（1978年11月号）の表紙にも当時の写真が載っていますので見比べてみてください。